

近年、雌子牛の効率的生産による遺伝改良促進・計画的個体生産など多くのメリットがあるため、性選別精液（メス精液）が普及してきました。最新の統計によると、道内の使用率は、ホルスタイン種の人工授精全体における20・0%を占め、ここ5年間で増加傾向にあります。

一般的に雌子牛は雄子牛よりも体格が小さいので、分娩難易度の低下が期待でき、特に体格・骨盤の小さい初産牛で安産となることが多いとされています。

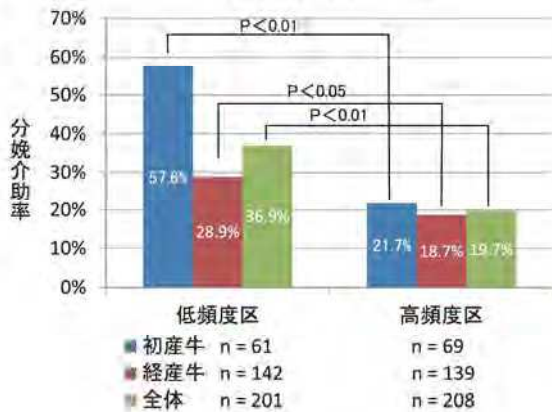
今回は、実際に性選別精液の使用が分娩介助率・死産率にどのような影響を与えるかについて調査しました。

○調査内容

2014年から2018年の5年間で、性選別精液の使用率が0・4%から69・3%と著しく増加した、石狩管内の1酪農家で調査を行いました。

性選別精液の使用率が低かった2014年、2015年を「低頻度区」（使用率3・8%）、高かった2017年、2018年を「高頻度区」（使用率61・2%）とし、分娩介助率・死産率について、それぞれ初産牛・経産牛・全体で比較を行いました。

分娩介助率の比較



死産率の比較



分娩介助については、牛群検定成績の分娩難易スコアに基づき、スコア2（軽い介助）以上を分娩介助としました。死産については、胎齢240日以上、出生当日の死亡を死産としました。

○結果

分娩介助率について、初産牛で57・6%から21・7%、経産牛で28・9%から18・7%、全体で36・9%から19・7%と、いずれも有意に低下しました。死産率については、初産牛で15・8%から4・3%と有意に低下しました。

以上から、性選別精液の使用により、初産・経産牛ともに分娩介助率が低下し、初産牛で死産率が低下することが改めてわかりました。安定した後継牛の生産に加え、分娩介助の頻度低下が期待されます。

さらに、難産に起因するような胎盤停滞などの周産期疾病の低減、順調な子宮回復、繁殖成績向上なども期待できます。

性選別の技術は年々向上し、受胎率も改善されています。性選別精液の利用はこれからさらに増えていくと考えられます。ぜひ、導入をご検討ください。

（獣医師・富永翔太）